

2021 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 優秀賞

一人ひとりがモザイクのピースに

(原文は英語)

クララ・シマ・アガラジー（14 歳）

カナダ

私が 10 歳の頃、一人の若い女性が自分にとって人生とは何であるかを友人に話しているのを耳にした。不思議なことに、その人のことは今でも昨日のことのように覚えている。アイスクリーム屋の近くにいたその女性は、栗色の髪をしていた。夢中で話をするその女性は、友人に事細かに説明している。自分の話に注意深く耳を傾けている 10 歳の子どもの存在にはまったく気づいていない。その女性は自分の意識の目覚めについて語り、あらゆるものと違った視点から見るようになったこと、自分が地球上に存在する意義が分かったことについて説明していた。まだ 10 歳だった私には、その人の言っていることはよく理解できなかったが、その後も忘れるることはなかった。けれども思い出すたびにいつも混乱した。

あれから数年が経ち、あの時のことが急に思い出された。あの女性が話していたことを理解できるようになった今、その意見には反対だと感じる。人生は、より高い意識へと上昇するのを待ちながら、盲目的にたどるだけの平たんな道ではない。人生とは、一本道ではなく、進むことのできるルートや進むべきルートが無秩序に、複雑に絡み合ったものだ。正しい選択をすることもあれば、間違った選択をすることもある。私たちの一つ一つの決断が、人生を形づくる道に影響を与える。目覚めや気づきというものは、一晩のうちに起こるものではない。気づかないほどの小さな変化が積み重なり起こるものだ。私たちが何かを読み、描き、聞き、見るたびに、そして何よりも、私たちが誰かの人生と交わるたびに、私たちは目覚めていく。

私は、人生とは、ごちゃごちゃなもので誰もがその意味を理解しようと努力しているのだと思う。しかし、自分たちが正しい方向に進んでいるのか、正しい選択をしているのかは、知るよしもない。正しい結末に向かっているのかさえわからない。私が人生とは何であるかを尋ねてみた人たちの中には、人生は一度きりなのだから、周囲のことなど気にせず、周囲が何と言おうと自分が幸せと思えることならなんでもすると答えた人がいる。私は、この考え方には反対だ。命は一つしかないかもしれないが、私たちは、次の世代の人たちにとってより良い世界をつくるために、その命を生かすべきではないだろうか。

私たちはなぜ、周囲の人たちにどう見られているのかを気にしながら生きているのだろう。私はよくそんな疑問を抱く。実際には、そうした人たちと接する時間はごくわずかで、いずれは忘れてしまう人たちだ。それにもかかわらず、私たちはどうして、周囲の人たちが自分のことをどう思っているのか

をわざわざ気にしなければならないのだろうか。その理由はおそらく、私たちが皆、互いに影響し合う存在であることに何となく気づいているからだろう。私たちは、それぞれの複雑な道をただ歩むのではなく、誰かの人生と絡み合いながら生きている。地球上の人間は皆、出会った人たちに憧れたり、模範としたり、その考え方を倣つたりしながら生きてきた。たとえそれが一瞬のことであってもだ。私たちは、両親や友人、テレビや映画で見た人たちを見習って生きている。アイスクリーム屋のそばで見かけた、あの栗色の髪の女性さえ手本にすることもある。朝起きてベッドを直すのは、両親からそう教わったから。祖父母のレシピどおりに料理するのは、それが一番おいしいと教わったから。友人から聞いたジョークを誰かに話したり、他の人の笑顔を見て微笑み返したりもする。私たちは皆、望むか望まないかにかかわらず、互いに影響し合っている。私たちは小さい頃から、一人ひとりが欠点も才能も含めて唯一無二の存在だと言われてきた。しかし、私たちは、それをはるかに超える存在だ。私たちは、これまでに出会った人たち全員が寄せ集まってできた一つのモザイクなのだ。命は、自分だけのものではない。これまでに出会った人たちや、時には思いをはせた人たちと共有しているのだ。私たちは自分のためだけに存在しているのではない。互いに助け合い、愛し合い、この世界をより良くしていくために存在しているのだ。

いつの日か、私たちは皆、忘れ去られる。他の人たちが私たちに対して抱く思い出は、私たちの命がそうであるように、いずれは消えてなくなるだろう。思い出は永遠に続くものではない。しかし、私にとって人生とは、誰かに影響を与えること、その人のモザイクに、唯一無二のピースを残すことだと思う。だからこそ私は、いつでも人に優しくあろうとし、より良い未来のために勉強し努力している。思いをこうして言葉にして書き記しているのもそのためだ。私たちがかつて生きていたという記憶は、時が過ぎれば確実に消えてなくなるだろう。しかし、私たちがこの世界と他の人たちに与えた影響は、決して忘れ去られることはないだろう。